

支援を目的にした国際交流に初めて参加したのは1982年であるからずいぶん昔の話になる。当時の中国の地方都市は大都市に比べて文化大革命(1966~1976年)の影響が随所に残り、大学や研究機関等の機能や活動の実態は国際的にみて大きく出遅れていた。

私の所属していた東京大学と中国の安徽省合肥市(紀元前3世紀ごろにできた古い街で三国時代には曹操と孫権の争いが繰り広げられた地)にある中国科学技術大学(米国の大学をモデルに1958年北京に設立されたが文化大革命の時代に北京を追われ、1978年合肥市に落ち着いた)との間で始まった学術交流は、教員の相互派遣による相互協力であったが、実態としては発展途上の大学に対する学術支援の色彩が濃く、JICAの支援活動にも通じるものがあった。



1985年頃の中国科学技術大学正門 現在は別の場所に移されている

交流分野は情報工学、物理学、精密機械工学、材料工学、科学管理分野であったが、来日予定の中国側教員の多くが日本語の日常会話ができることから、来日の際に研究室での活動を円滑に行えるように専門用語を中心とした科学日本語教育も行うことになった。しかし、当時は外国人に一般的な日本語を教える教員は多数いたが、科学系の広い分野にわたり、専門用語の解説や適切な使用方法などを教えることのできる教員はほとんどいなかった。私の専門分野は分析化学や環境化学(化学物質の安全化処理)であるが、当時シンガポールの留学生から中国語を習っていたことや専門書の中国語訳の手助け



授業風景

していた関係で交流への参加を打診された。しかし専門外の仕事であり、本業にも支障を来す恐れがあることから難色を示していたところ、出張期間を1ヶ月とし、とりあえず様子を見に行くということで了承し、交流の実質的な第一号

として赴任することになった。中国側からの伝えられた事前情報を基に高等学校の理科系の教科書(化学、物理、生物、地学など)から科学用語を抜き出し、その用語を使用した問答集の作成と科学技術に関するトピックスなどを集めた資料を教材として準備した。

ところが実際に赴任してみると事前情報はほとんど役に立たず、新たなテキスト作りに翻弄される日が続いた。この初めての中国の経験は衝撃的であり、私自身の認識している常識と全く異なる常識が存在することも学んだ。

冷静に考えれば、それは当たり前で驚くに当たらないことなのだが、

中国人が東洋人として風貌が似ているうえ、漢字という共通点があるにも関わらず、欧米人より遙かに遠い存在と感ずることも少なくなかった。この悪戦苦闘で始まった活動の体験は、国際交流に対する基本姿勢の在り方を考える貴重な機会となった。それは、相手国と自国の双方の文化や歴史と社会制度の仕組みや価値観などについて多角的な視点から相応の理解が必要なことと併せて交流の現場ではいわゆる「同じ目線」で対応できる力量も必要であることを学んだ。



街中にある明教寺の教弩台(きょうどだい)前で三国時代に魏の曹操が兵士に弓の訓練をしたところ

この交流では結果としておよそ10年にわたり毎年1ヶ月程度、中国科学技術大学に出張し、科学日本語教育を中心とした活動に携わることになった。交流への参加に先立ち、当時の日本側の責任者の教授から「人の育成は植林と同じで、すぐに結果が出なくても次の世代

またその次の時代に実を結ぶような考え方で対処することも必要だ」といわれたことが忘れられない。この交流による具体的な体験談は、関東学院大学における「国際協力の現場」で紹介している。その後、JICAの専門家として天津および北京のプロジェクトに参加し、専門分野である化学物質の安全管理や有害廃棄物の適正処理に係わる支援やカウンターパートの研究室での受け入れなどを経験してきたが、いずれの場合でも中国科学技術大学での体験が大いに役立っていることは言うまでもない。



大学近くの公園で時折、人民服で仕事をしていた

*すずき・よしみつ JECK会員 専門分野:化学物質安全管理、有害廃棄物処理、分析化学 JICA任国:中国